

群馬県内のヤマビル分布状況の変遷(中間報告版)

群馬県林業試験場 坂庭浩之

キーワード: アンケート調査、ヤマビル、分布変遷、*Haemadipsa zeylanica japonica*

1 はじめに

ヤマビル(*Haemadipsa zeylanica japonica*)は、陸生ヒルとして人や野生動物を吸血し生存する環形動物である。落ち葉の下などに潜み動物が近づく振動や呼気に反応し素早く付着する。全国的には秋田県から鹿児島県まで広く生息している。群馬県におけるヤマビルの生息分布の状況は筆者らが7年前の2009年に報告したのが最初の報告となっている(杉山・坂庭 2009)。

ヤマビルが生息することは、森林内作業や住民の生活の不安につながり、県外からの登山者が被害にあうなど、観光面でも負の影響が生ずる恐れがある。また、シカやイノシシなど野生動物の分布拡散と強い関係性があることから、詳細な生息地点の把握は将来の影響評価に必要な基礎データとなることから本調査を実施した。

本調査では2009年時点の調査よりその精度を高めるため、調査対象者を自然環境に対して一定の知識を持つ者とし、その手法も被害発生点や目撃地点を地図に直接記載してもらう方法とした。

2 方法

調査方法は記名アンケートによる方法とした。アンケート対象者は、鳥獣保護管理員(65名)、自然保護指導員(54名)、県内森林組合、県内素材生産組合、自然保護関係者等247組織・名を対象とした。

アンケートへの記載は「ヤマビル調査用地図」に被害発生地点、目撃地点などを記載してもらい、別紙にその時の状況を記入することにより詳細状況を把握した。

ヤマビル調査用地図の作成のための地理情報は、国土地理院が提供する基盤地図情報(<http://fgd.gsi.go.jp>)から、行政区画の境界、水涯線を利用した。また、オープンストリートマップから道路図、等高線図を利用した。地図の作成および分析にはQGIS(Ver2.18.1 <http://qgis.org>)を使用した。

ヤマビル調査用地図は、斜面単位での判読を容易にするため等高線図をもとに、斜面陰影図を製作し、記入者が山の斜面の凹凸を判読しやすくする工夫を施しA2用紙(両面)に概ね1/20万の縮尺で印刷した。

分析方法は、2次メッシュの1/4に分割した5kmメッシュを設定し、そのメッシュ内のヤマビルの生息状況から、①広範囲の生息、②狭範囲の生息として判断した。

3 結果・考察

図1は杉山・坂庭(2009年)の調査による結果を再度図化した。図2に今回の調査結果を並列に記載した。

2009年の調査結果では、広範囲の分布:17メッシュ、狭範囲の分布:21メッシュ、合計38メッシュであった。

2016年の調査結果では、広範囲の分布:27メッシュ、狭範囲の分布:23メッシュ、合計50メ

図1 2009年調査

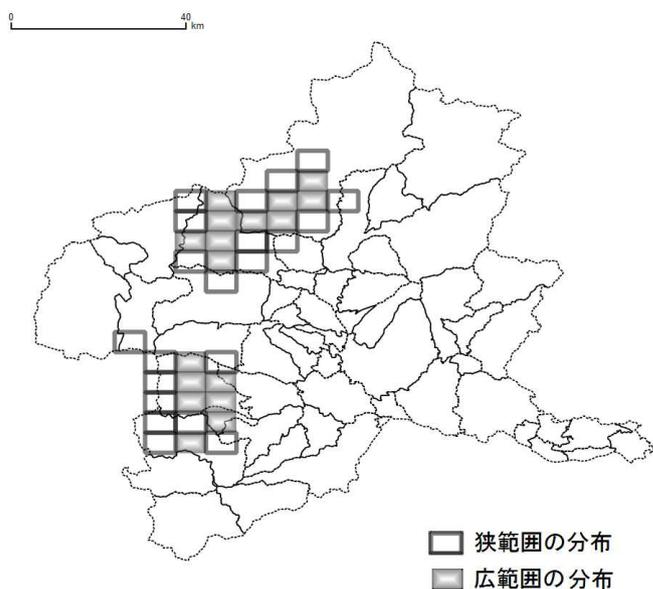


図2 2016年調査

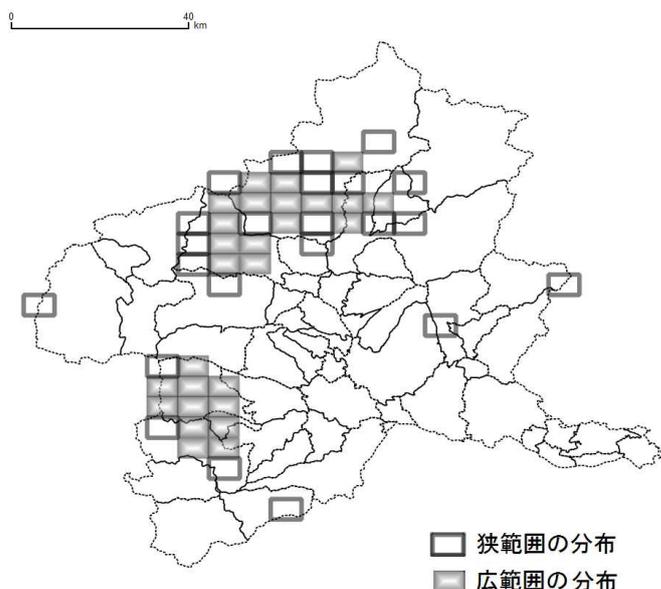


表 両調査の比較

分布状況	数
減少した	8
変わらない	21
追加された	17
拡大した	9
合計	55

因については、野生動物(シカ、イノシシ等)との分布変遷を把握した上で解析することとする。本報告は、途中段階のものであり、表や図2については追加調査により変更になる可能性があることを併せて記載する。

文献

杉山直人・坂庭浩之,群馬県内のヤマビル分布状況(2009年),群馬県立自然史博物館研究報告(14):145-148,2010

ツシユであった。

2009年調査(図1)と2016年調査(図2)を比較するとマビルが生息しているメッシュ数は7年間で1.3倍に増加したことが確認された。

この分析の結果、新たに分布が追加された17メッシュの中で、7年前の調査では分布がなく今回の調査で急速に分布が広がった場所が抽出された(表)。例としてMeshCode 55390022(沼田市戸神山周辺)、55390022(川場村)、55381627(三国山周辺)では、被害報告が広範囲にわたり、分布が急速であったことがアンケートでも示された。また、54395177(桐生市黒保根町の梨木温泉周辺)でも以前から分布があることが報告された。この場所は赤城山山系に属する唯一の生息地である。

今回のアンケート調査では分布減少が8メッシュで確認されたが、2009年の調査手法との違いにより生じた可能性があり、追加調査を要する地点である。

アンケートの中で、ヤマビルが森林から農地に広がる事例も報告され、農業生産にも影響が及んでいることが確認された。近年になり分布が急速に拡大した地域では、ヤマビルへの関心が高く、早急な対策を求めるものもあった。

7年間で1.3倍に分布拡大した要